

令和5年第1回一都三県サバ漁海況検討会
令和5年漁期サバたもすくい網漁、棒受網漁の見込み

令和5年1月11・12日

参加機関：東京都島しょ農林水産総合センター、神奈川県水産技術センター、静岡県水産・海洋技術研究所、千葉県水産総合研究センター

協力機関：水産研究・教育機構水産資源研究所、茨城県水産試験場、漁業情報サービスセンター

1 予測

(1) 海況

【予測（2023年1～6月）】

黒潮大蛇行が継続し、A型基調で推移する。

蛇行北上部は概ね伊豆諸島海域の西側に位置し、伊豆諸島北部海域は、概ね暖水に覆われ、沿岸水温は新島から三宅島周辺は「高め」～「極めて高め」、大島周辺は「高め」で推移する。房総沖では、接岸傾向で推移するが、一時的に離岸することがある。水温は「平年並」～「やや高め」で推移する。

伊豆諸島北部では1月上中旬は17～19℃、1月下旬～2月上旬は16～19℃で推移する。三宅島及び銭洲周辺では、1月上旬～2月下旬まで19～20℃で推移する。

【説明】

1月10日現在、黒潮は、御前埼に接近した後東進し、銭洲～御蔵島付近を通過した後、房総沖で離岸し、北東に流れている。水温は、伊豆諸島北部 19.5～20.5℃、三宅島 20～20.5℃、銭洲海域 20.5～21℃であった。

黒潮は期間を通じてA型で推移し、伊豆諸島海域の西側を北上する。その後、御前埼沖で向きを東に変え、銭洲周辺や三宅島周辺を通過しやすい。このため、これらの海域では漁場水温が上昇する。また、北部海域へも黒潮からの暖水が波及しやすく、波及時には漁場水温が上昇する。一方、房総沖では低気圧性渦の接近により一時的に離岸するものの、概ね接岸傾向で推移し、黒潮から暖水が波及しやすい。

なお、1月中旬～2月下旬の水温は水産研究・教育機構水産資源研究所の海況予測システム（FRA-ROMS II）を参照した。

海況予測の考え方

黒潮流路については、12月の長期海況予報を参考にする。

2か月後までの黒潮流路及び水温は、FRA-ROMS II等を参考にする。ただし、現況を優先する。

大蛇行型の場合

- ・漁期中はA型流路（A型は継続期間が長い）
- ・伊豆諸島海域は、水温高めで推移

非大蛇行型の場合

- ・西の小蛇行の位置と規模を確認する。（都井岬に蛇行部があれば、2～3か月後に伊豆諸島海域に到達する）。
- ・4月以降は長期予報のとおり。
- ・N型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」～「平年並」、三宅島付近は「平年並」～「高め」。野島埼沖の黒潮離岸距離は「平年並」。
- ・B型流路の時、伊豆諸島北部海域は「高め」～「極めて高め」、三宅島付近は「高め」～「極めて高め」。野島埼沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「やや接岸」。
- ・C型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」で暖水波及時に一時的に「高め」、三宅島付近は「低め」。野島埼沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「著しく離岸」だが、伊豆諸島東をS字に北上する場合には「接岸」。

(2) 漁況

①マサバ

【予測 (2023 年 1~6 月)】

(ア) 来遊量と漁獲量

4 歳魚 (2019 年級群) は前年を大きく下回る。5 歳 (2018 年級群) 以上は前年を上回る。

全体としては漁獲状況の悪かった前年並かやや下回る。

(イ) 漁期・漁場

初漁は 2 月上旬以降に伊豆諸島北部海域 (利島~大室出し) となる。主漁場は漁期を通して伊豆諸島北部海域となり、盛漁期には銭洲周辺海域及び三宅島周辺海域にも漁場が形成される。漁期後半は伊豆諸島北部海域が主漁場となる。

(ウ) 魚体

26~33cm の 4 歳魚と 32~38cm の 5 歳以上となる。

※年齢は年初に加齢し 2023 年時で表す。魚体は尾叉長で表す。

【説明】

漁期当初のマサバ推定来遊資源量・漁獲量

来遊資源は、加入量が近年の平均 (最近 10 年) を上回る水準である 2018 年級群 (5 歳魚) と近年 (最近 10 年) の平均を下回る水準の 2019 年級群 (4 歳魚) 及び加入量が近年の平均程度の水準の 2017 年級群 (6 歳魚) が主体になると考えられる。

2017 年級群 (6 歳魚) は、近年の平均程度の加入量であるが、6 歳魚の残存資源尾数は前年を上回ると推定された。

2018 年級群 (5 歳魚) は、近年の平均を上回る水準の加入量であり、残存資源尾数は前年の 5 歳魚を上回ると推定された。2018 年級群は 2023 年 1 月時点における残存親魚量の 37% を占めている。

2019 年級群 (4 歳魚) は、近年の平均を下回る水準の加入量であり、残存資源尾数は前年を下回ると推定された。

2020 年級群 (3 歳魚) は、近年の平均程度の水準であり、残存資源尾数は前年を上回ると推定された。

卓越的な加入量であった 2013 年級群以降、過去の高水準期と比較しても成長は遅くなっている (由上ら「令和 3(2021) 年度マサバ太平洋系群の資源評価」)。

この成長の遅れに伴い成熟開始年齢の高齢化がみられており、2016 年漁期以降の年齢別成熟割合は、2 歳魚は 0%、3 歳魚は 30% と仮定した。

各年級群の状況を考慮した上で、2023 年 1 月当初におけるマサバ来遊資源量 (3 歳魚の一部と 4 歳以上) は、漁獲状況の悪かった前年を上回ると推定された。

海況は、前年と同様に黒潮流型は A 型基調で推移すると予測されていることから、漁獲割合 (漁獲量/来遊資源量) は同じく A 型で推移した 2018~2022 年漁期平均の 0.18% であると仮定すると、漁獲量は 3,449 トンと試算される。また、近年漁船勢力が減少していることを考慮し、直近 2 年の平均値 (0.13%) を適用した場合は、漁獲

量は2,499トンと試算され、いずれも前年を大きく上回る（前年比172～238%）と考えられる。

マサバ来遊資源量には3歳魚の一部が計上されているが、2022年10～11月に北部まき網漁業による銚子水揚げ物の明け3歳魚（2020年級群）の尾叉長は、24～27cmで、いずれも30cm以下の小型魚であり、35cm以上の大型魚の割合は低かった。近年のマサバ太平洋系群の成長は遅くなっており、成熟開始年齢の高齢化も見られる。伊豆諸島海域への回遊は産卵回遊であり、現在3歳魚の成熟割合は30%、4歳魚は100%と仮定されているが、実際にはさらに低いと考えられ、伊豆諸島海域への3～4歳魚の来遊量は少ないと想定される。また、今期の漁船数、規模に変更はない。これらを考慮すると、推定された漁獲量（2,499～3,449トン）は過大評価の可能性がある。

初漁日、漁場

北部まき網漁業の2022年12月中下旬の漁場は、三陸南部～金華山沖と鹿島灘沖～犬吠埼沖であり、2021年12月下旬（鹿島灘沖～犬吠埼沖）よりも北に形成された。2022年12月の緯度経度5分ごとに集計した漁場水温の平均は16.8℃であり、2021年12月平均（15.7℃）より高く、2017～2021年平均（15.6℃）よりも高かった。2023年1月6日夜の漁場は常磐南部（いわき沖）が主漁場であり、2022年1月上旬（犬吠埼沖）よりもかなり北に形成された。漁場水温は、17.5～17.9℃であり前年同期（16.0℃）より高かった。2022年度第2回太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報によると、黒潮は房総沖では接岸傾向であり、黒潮から暖水が波及しやすく、沿岸水温は「平年並」～「やや高め」と予測されている。

12月末時点では、鴨川市漁協所属のハイカラ釣漁船は出漁していない。

千葉県漁業調査船ふさみ丸により、2023年1月6日に行ったハイカラ釣り調査では、御宿沖でゴマサバ主体に漁獲され、マサバは混じる程度であった。

また、外房沿岸の定置網では1月4日にゴマサバ1トン程度にマサバがわずかに混じた。南下群と思われる大型マサバの入網は確認されていない。

さらに、調査船千葉丸が1月6日夜に行ったたもすくい網による調査では、大島千波で2トンのゴマサバを漁獲し、マサバはわずか23尾であった。

2023年1月12日現在、神奈川県、静岡県の調査船による調査は行われていない。

以上、関連情報は少ないが、まき網及びハイカラ釣り並びに棒受網、たもすくい網の漁況経過から、1月上旬時点では、主群は鹿島灘沖～犬吠埼沖周辺海域には滞留しておらず、前年の最終日（金華山沖）よりは南に位置すると考えられるが、南下は例年より大幅に遅れていると推定される。一方、黒潮は現時点では房総沖でやや離岸し、犬吠埼沖では接岸傾向である。このため、同海域での魚群の南下は妨げられている可能性がある。しかし、水研機構の海況予測モデル（FRA-ROMS II）や気象庁の予測モデルによると、房総沖では1月下旬に黒潮がやや離岸する可能性がある。一方、伊豆諸島海域では、これらモデルによると、少なくとも2月下旬まで黒潮は銭洲～三宅島付近を東進し、同海域は暖水に覆われやすい。親魚量の増加傾向が顕著となった2013年

漁期以降、三宅島周辺海域が初期漁場となっていたが、2020年漁期は同海域が黒潮流路内にあったことから北部海域が初期漁場となった。また2016年漁期以降では、盛漁期には過去の高水準期と同様に、銭洲海域でも再び漁場が形成されるようになった。

漁場水温は、伊豆諸島北部海域では1月上中旬は17～19℃、同下旬～2月上旬は16～19℃で推移し、三宅島及び銭洲周辺では、1月上旬～2月下旬は19～20℃で推移すると予測されている。

以上のことから、昨年より遅く2月上旬以降に伊豆諸島北部海域で初漁になると考えられ、その後も黒潮は伊豆諸島海域の西側を北上した後、銭洲～三宅島付近を東進するため、伊豆諸島北部海域が主漁場となる。一時的に黒潮が南偏し、黒潮や黒潮からの暖水波及が弱まると銭洲周辺海域にも漁場が形成され、一時的に三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

魚体

伊豆諸島海域へ来遊するマサバは主に2歳以上であったが、2013年級群以降、成長の遅れが顕著となり、成熟するのは3歳魚の一部と4歳以上となっている。

北部まき網で2022年11月以降に漁獲されたマサバは、23～27cmの明け2歳魚(2021年級群)～明け4歳魚(2019年級群)が主体となり、31～39cmの明け5歳魚(2018年級群)以上が混じった。

12月は23～26cm前後、体重200g以下の魚体が漁獲の主体であり、南下群と考えられる魚群が漁獲されたのは12月27日(漁場:金華山沖)で、32～38cm主体であった。

このことから、漁期初めの魚体は32～38cmの明け5歳魚(2018年級群)以上が主体となる。その後26～33cmの明け4歳魚(2019年級群)を主体に30cm未満の明け3歳魚(2020年級群)が混じる。

北上期

漁期終盤にマサバ主漁場への20℃以上の暖水波及があるときは、北上が開始される。近年、4月に入ると、1夜1隻平均漁獲量が減少する傾向がある。黒潮は予測期間中A型で推移するが、4月以降の北上流路の位置は現時点では不明であり、近年の傾向から判断した。なお、伊豆諸島より西方の海域(熊野灘など)に回遊した大型魚は、5月以降に来遊する傾向がある。

【マサバ予測の考え方】

漁期当初のマサバ推定来遊資源量

昨年 6 月末時点のマサバ資源尾数から、7～12 月の漁獲尾数及び自然死亡尾数を減じた尾数を年末時のマサバ資源尾数とする（水研機構データ）。これに、各年齢の平均体重を乗じた量を資源量とする。そのうち、4 歳魚以上と 3 歳魚の一部を産卵親魚と考える。

漁獲量

漁獲割合（推定来遊資源量に対する漁獲量の比率）は、2000 年代前半は 0.05%以下で推移していた。2011 年以降の漁獲割合は 0.08～0.88%の間で推移しており、直近 5 か年（2018～2022 年）の平均漁獲割合は 0.18%である。

初漁日、漁場

- ・ 漁期初めの 1～2 月におけるマサバの集群は黒潮系暖水の影響下（16℃以上）の瀬にみられ漁場が形成される。【過去 10 か年（2013～2022 年）の初漁時の漁場水温（海面）は 15.0～19.6℃（平均 17.9℃）】
- ・ 2012 年までは、漁期初め（産卵期前、1、2 月）の漁場は、ほとんどがひょうたん瀬～大室出しであった。【2013～2015 年は北部海域が低水温となり、三宅島周辺海域で初漁がみられた。産卵盛期には、三宅島周辺海域に漁場が形成されることが多い。】
- ・ 親魚量が増加傾向にある 2016 年漁期には、初期漁場は三宅島周辺海域、盛漁期には銭洲海域にも形成された。過去の親魚量高水準期にも同様の傾向が見られた。
- ・ 漁期後半は、北部海域が主漁場となる。【ただし、北部海域が継続して冷水域に覆われると、三宅島周辺海域で漁場形成が継続する。】
- ・ 犬吠埼以北の水温が高いと南下しない場合がある。【2008 年漁期は 1、2 月に常盤海域～鹿島灘に暖水が波及していたため、南下しなかった。】
- ・ 2019 年以降の初期漁場は北部海域の利島もしくは大室出しで漁場形成されている。2017 年からの黒潮大蛇行期以降、黒潮が銭洲～三宅島周辺海域を通過することが多くなり、漁期初めには、北部海域に適水温帯が形成されることが多くなった。

漁況

中熟期は水温が 16℃を超える暖水が波及する瀬に、産卵盛期には 18～20℃の暖水が波及する瀬に集群して、好漁となる。

魚体

漁獲物の体長組成から、大型個体が小型個体より先に来遊する。漁期終盤には、大型魚の割合が増える。

北上期

伊豆諸島海域の水温が20℃以上になると北上を開始し、漁場が消滅する。伊豆列島線上の5、6月における黒潮流軸の水温は22℃から25℃に昇温する時期なので、伊豆諸島海域が冷水渦に覆われる場合は漁場が継続する（例：2007年漁期）。

その他

予報及び漁況経過における前年比の目安は表1のとおりとする。

表1 来遊量及び漁獲量の評価の目安

予報	前年比	漁況経過	前年比
前年を下回る	-20%以下	前年を大きく下回る	-20%以下
前年並	-20%より大きく+20%未満	前年を下回る	-20%より大きく-10%以下
前年を上回る	+20%以上	前年並	-10%より大きく+10%未満
		前年を上回る	+10%以上+20%未満
		前年を大きく上回る	+20%以上

【マサバ資源管理】

マサバの資源量は1990年頃から低迷が続いていたが、2013年級群が卓越して高い加入量であったことから、資源量、親魚量とも増加傾向が続いている。また、現段階では2018年級群は2013年級群を上回る加入尾数と推定されているが不確実性は高い。

2021年度の資源評価では、親魚量の動向は増加傾向にあるが、親魚量の水準はMSYを実現する水準を下回り、漁獲圧はMSYを実現する水準を上回ると判断された。このことから、今後安定的な親魚量の維持・増大、加入量の安定を図るためには、引き続き未成魚の保護をはじめとした管理措置が重要である。

②ゴマサバ

【予測（2023年1～6月）】

（ア）来遊量と漁獲量

前年を下回る。

（イ）漁期・漁場

期間を通じて、伊豆諸島北部海域（ひょうたん瀬、高瀬、利島等）に漁場が形成される。黒潮流路によって、一時的に銭洲周辺海域や、三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

（ウ）魚体

尾叉長28～35cmの3歳魚（2020年級群）、31cm以上の4歳（2019年級群）以上を主体に、27cm以下の1歳魚（2022年級群）、26～30cmの2歳魚（2021年級群）が混じる。

※年齢は年初に加齢し2023年1月時点で表す。魚体は尾叉長で表す。

【説明】

来遊量と漁獲量

全年級群を合わせた来遊量の予測には、年別の1～6月と前年7～11月の棒受網CPUE（操業隻数あたりの漁獲量）の相関関係（図1）を使用した。今回の予測期間（2023年1～6月）における来遊量は、前年7～11月の棒受網CPUEの値から前年同期の88%と推定され、来遊量は前年をやや下回ると考えられた。これまでの1～3歳魚の年級群別の来遊量予測には、小川港所属のさば棒受網船の標本船日報から求めた海区ごとの1揚網あたりの漁獲量と年齢別漁獲重量から算出した各年級群の年別の前年7～11月の資源密度指数の累積値（以下、累積資源密度指数）と、1～6月の累積資源密度指数との相関関係から予測していた。しかし、近年の資源量低下に伴い予測値と実際の値が合わない可能性があった。そこで資源状態を表す指標として、令和3年度ゴマサバ太平洋系群資源評価において示された親魚量（SB）と、MSYを実現する水準となる親魚量（SB_{msy}）の比（以下、SB/SB_{msy}）を用い、SB/SB_{msy}が1以上と1未満の年に分けて分析した。その結果、SB/SB_{msy}<1の年の年級群の場合、明け1歳魚、2歳魚及び3歳魚において、前年の7～11月の累積資源密度指数と1～6月の累積資源密度指数の間に相関関係が見られた（図2）。令和3年度ゴマサバ太平洋系群資源評価によると、2015年以降、資源全体のSB/SB_{msy}は1未満であるため、今回の来遊予測ではSB/SB_{msy}<1の年の年級群における資源密度指数を用いた。

1歳魚（2022年級群）について、2023年1～6月の累積資源密度指数は前年の487%と推定されたが（図2）、7～11月の棒受網による漁獲割合は3.9%であった。そのため、来遊量は前年を上回ると考えられるが、予測期間における漁獲の主体とはならないと考えられる。

2歳魚（2021年級群）について、累積資源密度指数は前年の411%と推定されるが（図2）、2022年7～11月の棒受網による漁獲割合は19.3%であった。そのため、来遊量は前年を上回ると考えられるが、予測期間における漁獲の主体とはならないと考えられる。

3歳魚（2020年級群）について、累積資源密度指数は前年の676%と推定され（図2）、2022年7～11月の棒受網による漁獲割合は48.7%であった。そのため、来遊量は前年を上

回り、予測期間における漁獲の主体となると考えられる。

4歳（2018年級群）以上について、昨年まで行ってきた予測では4歳以上の残存資源は多くないとしていたが、2021年及び2022年の1～6月の漁獲割合はそれぞれ43.7%、64.6%と漁獲の主体であった。当該期間に漁獲される4歳以上の多くは三陸海域から南下回遊してくる産卵親魚と思われるため、現時点でその来遊量を推定するのは困難であるが、直近2年の傾向から今漁期においても主体となると考えられる。水産研究・教育機構水産資源研究所が試算したゴマサバ太平洋系群における2023年1月時点での4歳以上の資源量は、前年より減少傾向にあることから、来遊量は前年を下回ると考えられる。

以上のことから年級群の来遊水準は1～3歳魚までは上回る、4歳以上は下回ると予測された。直近2年の傾向から、全体の来遊量は4歳以上の来遊量の影響を強く受けると考えられることから、年級群毎の予測結果から、全体の来遊量は前年を下回ると考えられた。

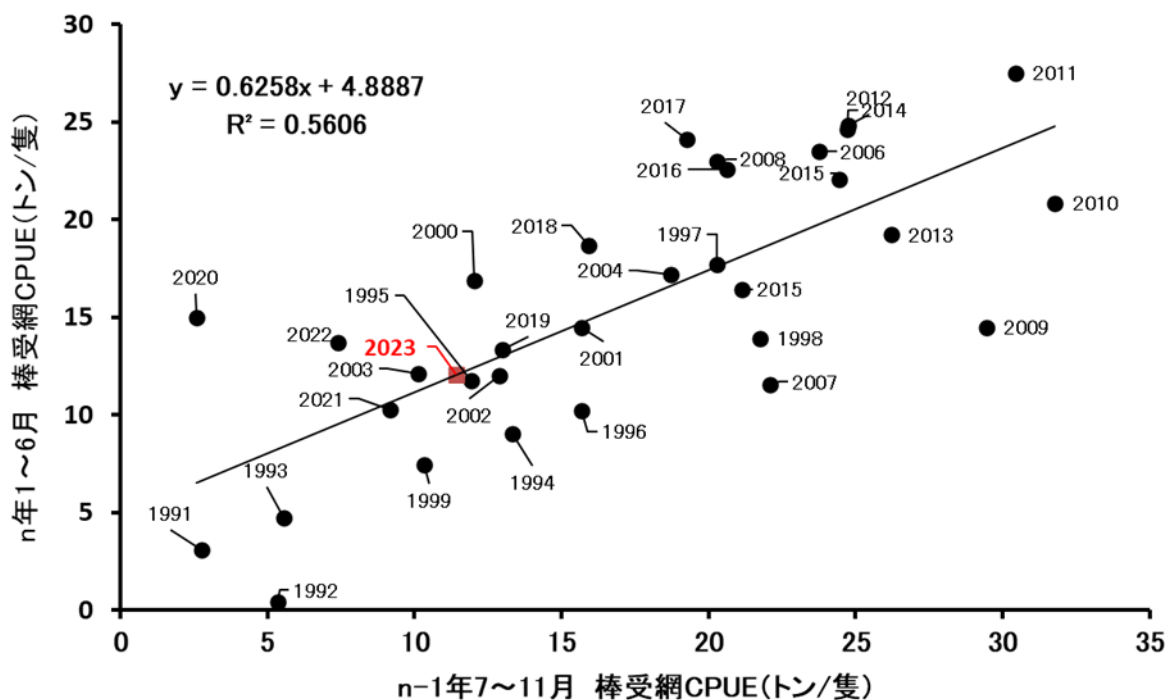
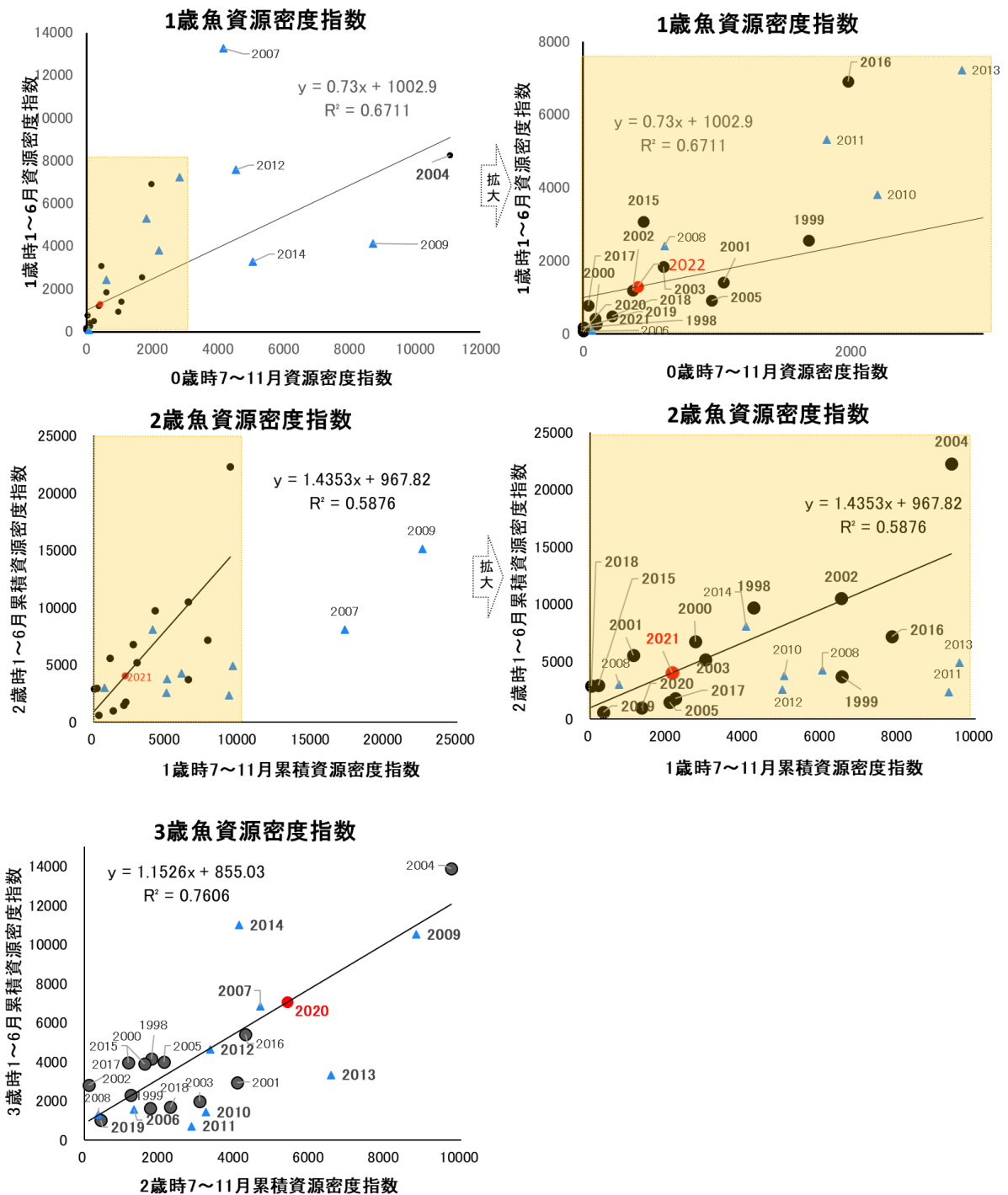


図1 (n-1)年7～11月の棒受網CPUEとn年1～6月の棒受網CPUEとの関係
* 図中の数字は年を示す。



- …令和3年度資源評価報告書にて $SB/SB_{msy} < 1$ となった年の年級群
- ▲ …令和3年度資源評価報告書にて $SB/SB_{msy} \geq 1$ となった年の年級群

図2 (n-1) 歳時7~11月の累積資源密度指数と、n 歳時1~6月の累積資源密度指数との関係(図中の数字は年級群)。親魚量(SB)と期待される漁獲量がMSYを実現する親魚量(SB_{msy})の比率(SB/SB_{msy})を資源状態を表す指標とし、各年を分類した。回帰直線は $SB/SB_{msy} < 1$ となる年の年級群を対象としている。

漁期・漁場

例年では三宅島周辺海域や銭洲周辺海域が主漁場となるが、令和4年は黒潮大蛇行により、当該海域周辺が黒潮の影響を強く受けたことで漁場となる機会が極端に少なかったこと、加えて令和5年1月以降も黒潮大蛇行が継続することから予測した。

魚体

年齢については、漁場に来遊する年級群ごとの来遊予測、2022年7～11月の漁獲状況から予測した。魚体については、近年のたもすくい網漁、棒受網漁の年齢別尾叉長モードから予測した。

2 経過と現況(2022年7月以降)

(1) 海況

黒潮は、期間を通じA型で推移し、伊豆諸島の西側を北上し、銭洲～御蔵島付近を通過する流路を取ることが多かった。また、7月～9月にかけては蛇行北上部が遠州灘沖でS字状となり、遠州灘～熊野灘に黒潮が接近することが多かった。9月下旬～10月上旬には、黒潮北上部の屈曲部が内側域に切離されたことにもない、黒潮が八丈島の南側を通過する非典型的な大蛇行となった。

房総沖における黒潮の離岸距離は、野島埼南東、犬吠埼南東方向とも7～10月までは平年並～離岸傾向で推移した。10月には大きく離岸したが、11月以降は接岸傾向が継続している。

1月10日現在、黒潮は、御前埼に接近した後東進し、銭洲～御蔵島付近を通過した後、房総沖で離岸し、北東に流れている。漁場水温は、伊豆諸島北部19.5～20.5℃、三宅島20～20.5℃、銭洲周辺海域20.5～21℃であった。

(2) 漁況

(ア) 秋季まき網漁業

北部まき網による7～11月のさば類漁獲量は6,039トン(去年同期22,592トン)であった。そのうち銚子港のさば類漁獲量は1,898トン(去年同期5,636トン)で、うちマサバが1,739トン(去年同期5,459トン)、ゴマサバが159トン(去年同期178トン)であった。銚子港への水揚げは、年内に本格化せず、12月28日の水揚げ最終日になってようやく南下群のまとまった水揚げ(430トン)が見られたが漁場は常磐北部～金華山沖と遠く、CPUEは21.6トン/網と漁況は好転しなかった。

7月は犬吠埼沖でマイワシやマアジに混じって漁場が形成され、8月上旬以降、三陸北部海域に北上し、銚子漁港への水揚げは2そうまきによるウルメイワシやマアジに混獲される程度になった。9月は八戸沖で、10月は三陸南部～常磐南部海域が漁場の中心となったが、南下群ではなく、11月上旬から三陸南部を中心に漁場が形成された。11月下旬になっても漁場は三陸南部海域で形成され、本格的な南下群を対象にした本格的な操業にはならず、銚子港への1日3,000トンを超える水揚げは年内にはなかった。2022年12月の緯度経度5分ごとで集計した漁場水温の平均は16.8℃であった。(2021年12月:15.7℃、2020年12月:13.5℃、2019年12月:16.0℃、2018年12月:17.6℃、2017年12月:15.3℃、2016年12月:17.1℃、2015年12月:15.0℃、2014年12月:14.7℃、2013年12月:15.4℃、2012年12月:16.5℃)

北部まき網で2022年11月以降に漁獲されたマサバは、23～27cmの1歳魚(2021年級群)～3歳魚(2019年級群)が主体となり、31～39cmの4歳魚(2018年級群)以上が混じった。

12月は23～26cm前後が漁獲の主体であり、南下群と考えられる魚群が漁獲されたのは12月27日であった。

一方、ゴマサバは12月以降の北部まき網漁獲物への混獲は2割程度で終始した。

年明け後は1月6日の晩から操業が始まった。漁場は常磐北部（いわき沖）で、北部まき網全体でさばは187トン（速報値）が水揚げされ、うち銚子漁港への水揚げが17トン（速報値）であった。いわき沖の漁獲物は150～250gのマサバ主体で300～600gが混ざる程度であった。漁場水温は17.5～17.9℃で、当日の主対象はマイワシ中羽であり、北部まき網全体で約7,300トン（速報値）が水揚げされたが、マサバ漁場はマイワシ漁場よりやや沖で水深150mであった。CPUE（トン/網）は10トン前後の低い船が多かった。

（イ）沿岸さば釣り

神奈川県主要3港（松輪、三崎、長井）における2022年7～11月の立縄釣り、ビン釣り（通称、かかりサバ）及びハイカラ釣りによるマサバの漁獲量は10トンで、前年（7トン）を上回ったものの、平年（21トン）を大きく下回った。ゴマサバの漁獲量は6トンで、不漁であった前年（3トン）および平年（4トン）を上回った。

千葉県外房海域では、鴨川市漁協所属船のハイカラ釣りは、前年と同様に12月は出漁していない。

（ウ）定置網

外房沿岸の定置網では、12月下旬までマサバのまとまった漁獲はなかった。

神奈川県主要4港（三崎、長井、佐島、真鶴）における2022年7～11月の定置網によるマサバの漁獲量は354トンで、前年（191トン）を上回ったものの、平年（423トン）を下回った。ゴマサバ漁獲量は109トンで、前年（146トン）および平年（194トン）を下回った。

（エ）静岡県棒受網・たもすくい網

例年、当該期間は三宅島周辺海域での操業は棒受網による操業が主体であるが、黒潮大蛇行による伊豆諸島周辺での黒潮流路の北偏により、伊豆諸島北部海域（以下、北部海域）の利島、大島千波等でゴマサバ漁場が形成されたことから、7月以降もたもすくい網による操業が行われた。7月は北部海域の利島に漁場が形成され、CPUE（トン/隻）は上旬が17.5トンと好調であったが、中旬が11.6トン、下旬が9.0トンと徐々に低調となった。8月上旬は、引き続き同海域の大島千波及び利島に漁場が形成されたが、CPUEが7.8トンと低調になったことから、8月下旬以降は全船が棒受網の操業を開始した。8月下旬は北部海域のひょうたん瀬に漁場が形成され、CPUEは10.4トンであった。9月も引き続きひょうたん瀬が漁場となり、CPUEは上旬が12.5トン、中旬が8.8トン、下旬が9.3トンであった。10月になると、伊豆諸島周辺の黒潮流路がやや南下したことを受け、漁場は三宅島周辺海域の三本へと移り、CPUEは上旬が7.9トン、中旬が5.8トン、下旬が8.5トンと月を通じて低調であった。11月上旬以降に大島千波に漁場が形成されると、再び全船がたもすくい網へと転向した。同海域の操業は11月末まで継続し、CPUEは上旬が6.6トン、中旬が16.8トン、下旬が12.4トンであった。12月は大島千波及び利島に漁場が形成され、CPUEは上旬が8.2トンと低調だったが、中旬が17.0トン、下旬が21.7トンと徐々に好調となった。

2022年7～12月における静岡県主要4港（沼津、小川、伊東、静浦）におけるさば類の水揚量は、ゴマサバ1,013トン（前年の131%、平年（直近5年平均）の87%）であった。CPUEは10.9トン（前年同期9.8トン）であった。マサバの水揚量は1トン未満であり、稀に混じる程度であった。

漁獲されたゴマサバの尾叉長範囲は23～38cmであった。年齢別漁獲尾数の割合は、0歳魚（2022年級群）が3.9%、1歳魚（2021年級群）が19.3%、2歳魚（2020年級群）が48.7%、3歳魚（2019年級群）が19.9%、4歳（2018年級群）以上が8.1%であり、2歳魚が漁獲の主体となった。

年明け後は1月5日に利島、9日に大島千波にてたもすくい操業を行った。2日間で23トンの水揚があり、体長組成は28cm及び33cmにモードを持つ2峰型を示した。マサバは混じる程度であった。

（オ） たもすくい網

2022年7～12月における神奈川県主要2港（長井、三崎）には、たもすくい網によるさば類の水揚げはなかった。

2022年7～12月に千葉県民間船によるたもすくい網による操業はなかった。

2023年1月8, 10, 11日に千葉県民間船が大島千波海域でたもすくい網で操業し、7～14トンのゴマサバを漁獲した。マサバはわずかに混じる程度であった。

3 漁期前調査結果

（ア） 千葉県

千葉県漁業調査船ふさみ丸は、2022年12月15日、12月20日に勝浦沖および野島埼沖でハイカラ釣りによる調査を実施し、勝浦沖で29～35cm、野島埼沖で22～28cmのゴマサバを釣獲した。マサバは12月15日の勝浦沖で混じる程度であった。

また、2023年1月6日に御宿沖で行ったハイカラ釣り調査で、ゴマサバを釣獲した。千葉県漁業調査船千葉丸は、2023年1月6日夜にたもすくい網により調査を行い、大島千波でゴマサバ2トンを漁獲した。マサバは混じる程度（23尾）であった。

マサバの大きさは尾叉長32～42cm（モード39cm）、体重モード600g、ゴマサバは30～41cm（モード34cm）、体重モード450gであった。

（イ） 神奈川県

神奈川県漁業調査指導船江の島丸による調査は、1月12日現在行なわれていない。

（ウ） 静岡県

静岡県沿岸・沖合漁業指導調査船駿河丸による調査は、1月12日現在行なわれていない。